

支援センター名	むつ市子どもセンター
所在地	〒035-0072 青森県むつ市金谷一丁目1番1号
連絡先	Tel 0175-22-1111 Fax 0175-22-1488

事業の概要とポイント

<子どもによる子どものための情報発信>

F Mアジュール（放送局）や地域関係団体の協力を得て、小・中・高校生が地域の情報取材、番組制作など、子どもによる子どものためのラジオ番組の制作・子ども自らがパーソナリティとして出演するほか、収集した情報を「にじ色つうしん」情報紙として発行するなど実体験活動をしなが、放送メディアと紙メディアを活用した地域社会活動を通じて自己研鑽を図る。

- ① 放送番組名 「にじ色つうしん」
「F Mアジュール」をキーステーションとしたラジオ放送
30分番組 毎週土曜日1回
- ② 「にじ色つうしん」情報紙 発行 18,000部×2回 （市内全戸配布）

関係した学校・団体等の名称

市連合PTA、子供会育成会、民生委員、少年教育指導員、青少年健全育成、国際交流協会、レクリエーション協会、F Mアジュール、社会教育団体

地域の現況・特色

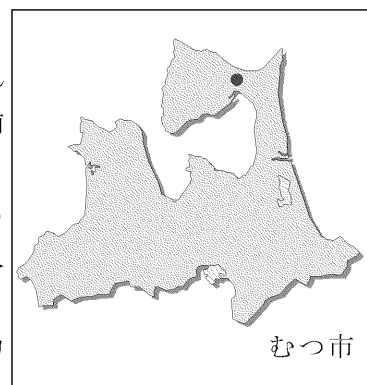
活動対象地域の人口67,616人 青森県むつ市

むつ市は、下北の最高峰・釜伏山を背に三方が海に囲まれ自然に恵まれた下北半島の中心地。古くから下北一円で産出される海産物を主に北前船による海運交易によって栄え京都、越前文化の生活習慣が今なお脈々と継承されている。

また、会津戊申戦争により明治2年「会津藩23万石」から「斗南藩3万石」としてむつ市（旧田名部）に17,300人が移住した。

教育熱心な会津藩士は、その後も下北の教育に大きな影響力を与え県内外に多数の教育者を輩出している。

津軽海峡に面した関根浜港には、日本最先端機能をもつ海洋地球研究船「みらい」の母港を初め独立行政法人海洋研究開発機構、むつ海洋科学館などアメリカ・海洋研究・ウツホ



ールとの連携研究により、世界屈指の海洋科学研究拠点となっている。

こうした恵まれた環境の中で、創造性に富んだ科学好きの子ども達の育成機会の充実を進めている。

企画から活動までの経緯

平成14年6月 県補助事業打ち切りで「子どもセンター」を解散せず継続の方法はないかと子どもセンター委員から市担当者へ相談があった。市の補助金支援は困難であるが何か方法がないものか模索してみることを約束した。

7月 市担当が県生涯学習課へ子どもセンターの事業内容になじむ補助金制度について問い合わせた。

県より「地域と学校が連携協力した奉仕活動体験事業」補助金制度を紹介された。

8月 子どもセンターへ打診し緊急会議を再三再四に亘り開催し、その結果、年度スタッフ確保など数々の困難はあったが、市民ボランティア・行政・FMアジュール局の役割を明確にすることで、事業運営の基盤づくりができ新規補助事業申請をすることを決定し、子どもセンターを設立した。

9月 新規事業としてこれまでの「にじ色つうしん」情報紙のほか、放送メディアを活用しながら子どもをスタッフとし、子どもが制作する、子どもを主体とした番組制作活動（完全学校週5日制の土曜日に活動する社会体験）をしたらどうかと子どもセンター委員から提案があった。

事業実施にあっては子ども達が自主的にできることと、子どもセンタースタッフ・行政がそれぞれの役割分担を図表化し作業確認を行った。

10月 スタッフ募集などの目まぐるしい準備期間ではあったが苦しいながらも活動実施にこぎ着け現在に至っている。

子どもステーション「にじ色つうしん」は、FMアジュールをキーステーションに子どもパーソナリティ（ラジオ放送）として活動を開始した。

- ・子どもパーソナリティ 18名（高校生4名・中学生4名・小学生10名）
- ・センター委員 11名
- ・ボランティア会員 3名

事例の展開内容（特色など）

コーディネーター、ボランティアスタッフが各団体機関や地域住民から情報収集した記事を自らがパーソナリティとなって地域FMアジュール（ラジオ放送）で毎週放送した。また、収集した貴重な情報を基に、年2回「にじ色つうしん」情報紙を発行した。

- ・アナウンス指導はFM局職員が行った。
- ・イベント等は、子ども自身の取材のほか、協議会委員及びボランティア会員が地域・学校との連携により情報を収集した。
- ・前半15分は子どもセンター及びボランティア会員が本の朗読、昔話、耳より情報を、後半15分は取材記事のほか学校・地域情報を子どもパーソナリティが担当した。

- ・子ども、親、地域住民と共通話題ができ、また子ども放送局開始とともに地域住民からの反響が大きく、子どもも子どもパーソナリティとして日に日に成長する姿が確認できた。

企画・活動する上でのポイント、留意点など

子ども自身がパーソナリティとして自覚を持って活動できる環境づくり、ボランティア会員との連携、地域住民からの協力体制づくり、会でできること、できないこと等それぞれの役割を明確にすることとし、一部会員だけが事業を背負うことなく人材能力の活用を行い、活動作業の均一化を図る。

事業実施に当たり、当初「生放送」であったことからクラブ活動、塾など子ども達の時間調整が難しく、やむなく脱会する子どももおり大きな課題となってきたため、コーディネーターの仲介によって放送局と協議が整い事前収録に切替えることができた。

子どもが活動しやすい環境づくりは、長期活動計画の中で重要なポイントである。

評価

子どもパーソナリティとしてラジオ出演などを通じ、子ども自身が社会の仕組み・事業の取組み方などを会得するとともにインターシップの場となり生き生きと活動し、貴重な実体験となっている。

こうした活動の源動力は子どもセンターコーディネーターの指導協力、学校終了後に収録現場まで送り迎えしてくれる親、それを快く迎えてくれる放送局、情報を提供してくれる地域・住民等々、どれ一つ欠けても事業継続できるものではなかった。

今後は、開設当時から活動している子どもの中には、将来放送関係の仕事をしたいと考えている子どもも出始めていることから、取材・原稿記事のまとめ方など機会あるごとにFMアジュール職員の協力を得て一步一步活動範囲の拡大を図りながら、活動する喜びと、将来の展望を見出せる子ども達をはぐくむ人材育成を展開していきたい。

活動風景



執筆者職・氏名：むつ市教育委員会委員会

生涯学習課 生涯係長 奥川 春美